

開催地名：長野県長野市	
開催日時	令和元年 11 月 2 日（土） 9：30 ～ 10：15
開催場所	長野市立西条小学校
語り部	平澤 つぎ子 （千葉県旭市）
参加者	西条小学校児童・保護者、西条地区住民 約 100 名
開催経緯	過去に地区内を流れる河川の氾濫による水害を受けたことがある本地域で、非常時にどのような対応が必要でどう行動するのか。またそうした事態に備え、どのように組織と連携し、環境整備を進めるのか。普段の生活の中での配慮点、心構えなどを伺いたいと思う。
内容	（１）はじめに 長野市内では台風 19 号の爪あとがまだあちこちに残り、復興のために自衛隊や市民ボランティアの皆さんが長野市内で活動されている。今回の災害で被害にあわれました方々、関係者の皆様に、心からお見舞い申し上げたいと思う。 （２）津波に襲われて 私は住む千葉県旭市は、東日本大震災での震度は 5 強であった。しかし、30 分後に茨城県沖震源の地震があり、再度 5 強を記録した。津波の第一波、第二波はそれほど高くなく、避難していた人が油断して海側に戻ったあと第三波がきて、死者 14 名、行方不明者 2 名という犠牲者が出た。沿岸の家はさらわれ、漁船は浜に打ち上げられた。家屋に突き刺さった船もある。 さらに土地の液状化があり、その面積は 874 ヘクタールに及んだ。液状化現象によって地面にふくまれる水分が動き、丈夫な建物も傾いた。舗装道路も波打ち、マンホールの蓋が持ち上がった。 （３）避難所の問題 市内 10 か所の避難所には約 3,000 名の市民が身を寄せていた。私は避難所へ 70 日間毎日通い、赤十字奉仕団としてさまざまな活動を行った。避難所には多くの問題があった。 まず、全身濡れた人が土足で入ってくることであった。頭から津波をかぶり、着の身着のままの人が多かったし、いつでも誰でも自由に出入りできるので、プライバシーが保てなかった。限られたスペースの中で、寝たり起きたり食べたりしなければならなかった。足を伸ばせば、誰かの頭を蹴ってしまうような、非常に狭いところでの避難所生活だった。また、どうしても周囲が汚れがちであり、大量のごみによる悪臭や害虫発生といった衛生面の問題もあった。 震度 5 強の揺れで今までにない恐ろしい経験をして、さらに津波の恐怖を体験して家を壊されてしまった人たちが、「明日からの生活をどうしよう」、「どこ

で過ごそうか」、「食べるものはあるのか」等々、心配を抱えた人たちが集まっている場所だった。子どもの声や泣き声が邪魔にならないはずはない。普段何でもないことでも、夫婦げんかが起きる。私が行っていた学校では20歳ぐらいの姉妹が取っ組み合いのけんかをしていた。精神的、心理的に非常にまいっているのが避難所である。

(4) 心のケアに注力する

避難所で私が力を入れたのは心のケアである。心に大きなぽっかり空いた人たちの集まりなので、始めはただ「おはようございます」と挨拶するだけにした。向こうから話をしてくれたときには黙って聞く。それを1週間ぐらい続けた。心が落ちつかない気持ちは私も避難者も同じである。そのうち話し相手になったり、相談を受けるようになった。そのときは非常にうれしかった。

赤十字奉仕団でやっている「ホットタオル」の提供も行った。蛇腹に折ったタオルをコップ1杯のお湯で湿らせ、それを渡す。外から仕事で帰ってきた人はまず顔を拭き、手を拭く。これはとても喜ばれた。少しでも避難所で生活している方々の役に立ちたい、その一心での活動だった。



開催地より

体験したからこそその、真に迫るお話を聞くことができた。地域で親子で、日頃から防災の意識を高くしていきたいと思う。